

補足プリント：グラム・シュミットの直交化法について

大矢 浩徳 (OYA Hironori)*

$\mathbb{K} = \mathbb{R}$ or \mathbb{C} とする. 本プリントでは \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間においてグラム・シュミットの直交化法がうまくいくことの厳密な証明を与える.

定義. V を \mathbb{K} 上のベクトル空間とする. V に写像

$$V \times V \rightarrow \mathbb{K}, (v, w) \mapsto v \cdot w$$

であって, 以下の性質 (i)–(iv) を満たすものが定まっているとき, V を計量ベクトル空間といい, 上の写像を V の内積と呼ぶ:

- (i) 任意の $v, w \in V$ に対し, $v \cdot w = \overline{w \cdot v}$,
- (ii) 任意の $u, v, w \in V$ に対し, $(u + v) \cdot w = u \cdot w + v \cdot w$, $u \cdot (v + w) = u \cdot v + u \cdot w$,
- (iii) 任意の $v, w \in V$, $c \in \mathbb{K}$ に対し, $(cv) \cdot w = \bar{c}(v \cdot w)$, $v \cdot (cw) = c(v \cdot w)$,
- (iv) 任意の $v \in V$ に対し, $v \cdot v \geq 0$, さらに, $v \cdot v = 0$ ならば $v = \mathbf{0}$.

ここで, $z = a + bi \in \mathbb{C}$ に対し, \bar{z} は z の複素共役 $a - bi$ である ($a, b \in \mathbb{R}, i = \sqrt{-1}$). 特に, $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ のときは, 複素共役をとっても変化しないので, 無視して良い.

例. 以下に計量ベクトル空間の例を挙げる:

- \mathbb{R}^n は

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix} := x_1 y_1 + \cdots + x_n y_n$$

によって, \mathbb{R} 上の計量ベクトル空間となる.

- \mathbb{C}^n は

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix} := \bar{x}_1 y_1 + \cdots + \bar{x}_n y_n$$

によって, \mathbb{C} 上の計量ベクトル空間となる. この内積はエルミート内積と呼ばれる.

- 1 変数多項式の空間 $\mathbb{C}[x] := \{a_0 + a_1 x + \cdots + a_n x^n \mid n \in \mathbb{Z}_{\geq 0}, a_i \in \mathbb{C} (i = 1, \dots, n)\}$ は

$$f(x) \cdot g(x) := \int_{-1}^1 \overline{f(x)} g(x) dx$$

によって, \mathbb{C} 上の計量ベクトル空間となる. この内積は L^2 -内積と呼ばれる.

- \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間 V の部分空間は V と同じ内積を用いることで再び \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間となる. 例えば, 2 次以下の多項式全体のなす $\mathbb{C}[x]$ の部分空間 $\mathbb{C}[x]_{\leq 2}$ は上の $\mathbb{C}[x]$ と全く同じ定義の内積を用いることで \mathbb{C} 上の計量ベクトル空間となる.

* e-mail: hoya@shibaura-it.ac.jp

定義. V を \mathbb{K} 上の計量ベクトル空間とする.

- $v \in V$ に対し, $\|v\| = \sqrt{v \cdot v}$ を v の大きさという.
- $v, w \in V$ に対し, $v \cdot w = 0$ のとき, v と w は直交するという.
- $B = \{u_1, u_2, u_3, \dots\}$ を V の基底とする. ここで,

$$u_i \cdot u_j = \begin{cases} 1 & i = j \text{ のとき,} \\ 0 & i \neq j \text{ のとき,} \end{cases}$$

が成立するとき, B を V の正規直交基底という. つまり, 正規直交基底とは, 各元の大きさが全て 1 で互いに直交するベクトルからなる V の基底のことである.

グラム・シュミットの直交化法はある (正規直交とは限らない) 基底から正規直交基底を得る方法を与えるアルゴリズムである.

グラム・シュミットの直交化法

V を \mathbb{K} 上の有限次元計量ベクトル空間とし, $B = \{v_1, \dots, v_n\}$ を V の基底とする. このとき, 以下の方法で V の正規直交基底を得ることができる:

$$\begin{aligned} u'_1 &:= v_1, \\ u'_2 &:= v_2 - \frac{(u'_1 \cdot v_2)}{(u'_1 \cdot u'_1)} u'_1, \\ u'_3 &:= v_3 - \frac{(u'_1 \cdot v_3)}{(u'_1 \cdot u'_1)} u'_1 - \frac{(u'_2 \cdot v_3)}{(u'_2 \cdot u'_2)} u'_2, \\ &\vdots \\ u'_k &:= v_k - \sum_{i=1}^{k-1} \frac{(u'_i \cdot v_k)}{(u'_i \cdot u'_i)} u'_i, \\ &\vdots \\ u'_n &:= v_n - \frac{(u'_1 \cdot v_n)}{(u'_1 \cdot u'_1)} u'_1 - \dots - \frac{(u'_{n-1} \cdot v_n)}{(u'_{n-1} \cdot u'_{n-1})} u'_{n-1}, \end{aligned}$$

とし,

$$u_k := \frac{1}{\|u'_k\|} u'_k, \quad k = 1, \dots, n$$

とすると, $\{u_1, u_2, \dots, u_n\}$ は V の正規直交基底.

注意. u'_1, u'_2, \dots, u'_n の時点で, 互いに直交するベクトルとなっている. 最後のスカラー倍はそれぞれのベクトルの大きさを 1 にするように調整する操作である.

グラム・シュミットの直交化法で正規直交基底が得られることの証明. まず, $\{u'_1, u'_2, \dots, u'_n\}$ が互いに直交するベクトルからなる V の基底であることを示す.

$\{u'_1, u'_2, \dots, u'_n\}$ が V の基底であること, 特に各 u'_k は $\mathbf{0}$ ではないこと:

各 $k = 1, \dots, n$ に対し, $\{u'_1, \dots, u'_k, v_{k+1}, \dots, v_n\}$ が V の基底であることを k に関する帰納法で示す. ($k = n$ の時が欲しい主張であることに注意.)

$k = 1$ のとき, 定義より $\{u'_1, v_2, \dots, v_n\} = \{v_1, v_2, \dots, v_n\}$ なので主張は正しい.

次に, $k \geq 1$ で $\{u'_1, \dots, u'_k, v_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$ が V の基底であることを仮定して, $\{u'_1, \dots, u'_k, u'_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$

補足：岩澤分解 (興味がある人向け)

上の「 $\{\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_2, \dots, \mathbf{u}'_n\}$ が V の基底であること, 特に各 \mathbf{u}'_k は $\mathbf{0}$ ではないこと」の証明中に行った議論から, 各 $k = 2, \dots, n$ に対して対角成分が全て 1 のある上三角行列 N_k が存在して,

$$\begin{aligned} (\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_n) &= (\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_{n-2}, \mathbf{u}'_{n-1}, \mathbf{v}_n) N_n \\ &= (\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_{n-2}, \mathbf{v}_{n-1}, \mathbf{v}_n) N_{n-1} N_n \\ &\dots \\ &= (\mathbf{u}'_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_{n-1}, \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n = (\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n \end{aligned}$$

となることがわかる. ここで, 対角成分が全て 1 の上三角行列の積は再び対角成分が全て 1 の上三角行列となることから, $N' := N_2 \cdots N_n$ とすると, N' は対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n) N'$$

と書けることがわかる. さらに, $N := (N')^{-1}$ とすると, N も対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_n) N$$

である. 次に,

$$A := \begin{pmatrix} \|\mathbf{u}'_1\| & & & \\ & \|\mathbf{u}'_2\| & & \\ & & \ddots & \\ & & & \|\mathbf{u}'_n\| \end{pmatrix}$$

とすると,

$$(\mathbf{u}'_1, \dots, \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n) A$$

である. 以上より,

$$(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n) AN$$

となる. この事実を V が \mathbb{K}^n ($\mathbb{K} = \mathbb{R}$ or \mathbb{C}) の場合に考えてみよう. すると,

- \mathbb{K}^n の基底 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$ を並べてできる n 次正方行列 $(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n) \Leftrightarrow$ 正則行列.
- \mathbb{K}^n の正規直交基底 $\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n\}$ を並べてできる n 次正方行列 $(\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n) \Leftrightarrow \begin{cases} \text{直交行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{R}) \\ \text{ユニタリ行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{C}). \end{cases}$

という対応があったので, 上の考察から以下の定理が言える:

定理 (岩澤分解)

任意の実正則行列 $X_{\mathbb{R}}$ に対し, ある直交行列 O , 正の対角成分を持つ対角行列 A , 対角成分が全て 1 の実上三角行列 $N_{\mathbb{R}}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{R}} = OAN_{\mathbb{R}}$$

と書ける.

また, 任意の複素正則行列 $X_{\mathbb{C}}$ に対し, あるユニタリ行列 U , 正の対角成分を持つ対角行列 A' , 対角成分が全て 1 の複素上三角行列 $N_{\mathbb{C}}$ が存在して,

$$X_{\mathbb{C}} = UA'N_{\mathbb{C}}$$

と書ける.